第 15 回講義　　2026 年 9 月 26 日

『フェイクニュースを哲学する』を手掛かりに

～何を信じるべきかを考える～

千葉大学人文科学研究院 教授　山田 圭一

千葉大学の山田でございます。連日テレビには佐倉市の水害のニュースが流れていましたので、参加予定の皆さんは大丈夫なのか、電車やバスは動いているのか色々心配しておりましたが，予定通りに大勢の皆さんの前で講演を行うことができ、嬉しく感じているところでございます。

はじめに

本日は、フェイクニュースについて書いた私の著書（岩波新書/フェイクニュースを哲学する）を手がかりに、フェイクニュースについていろいろお話をしたいと思います。始まる前にお話を聞いたところ，哲学の先生がこの場で講演する機会はあまりないそうですので、専門的な哲学用語はできるだけ使わないようにするつもりです。ただ私は哲学が専門なので、このフェイクニュースの問題について哲学の観点から切り込んで、どういうことが言えるのかをお話したいと思っております。

私の専門は認識論という領域で、一言でいえば「自分は何を信じればいいのか」というテーマです。古代や中世だと、神を信じていいのかとかという問題が中心でしたが、現代だとまさにフェイクニュースの真偽が問題になっています。抽象度の高い議論の問題から、インターネット上の情報という割と身近な問題まで、結構幅広い領域を認識論では扱っています。今回お話する「フェイクニュースを哲学する」というテーマは、まさにインターネットから入手する情報がメインツールになりつつある時代の中で、私たちは何を信じればいいのか、何を知ることができるのか、という問題を考えていくことになります。

最近はフェイクニュースという言葉が世界中であふれています。トランプ大統領は 9 月 18 日に、CNN などの報道機関を「やつらはフェイクニュースを流している。」ということでホワイトハウスから締め出しました。結果的にこの措置は、連邦地裁の命令によって数日後に解除されましたが・・・。またロシアのプーチン大統領も、言論統制の一環としてだと推測しますが、フェイクニュースという言葉を頻発するようになっています。

しかし「フェイクニュース」という言葉がそもそも何を意味するのかについて、これまで十分な議論はなされてきたとはいえないと思います。私はこのことが結構重要だと思っていて、それはフェイクニュースというのは新しく流行ってきた言葉なのかという問題にかかわってきます。というのも、フェイクニュースなんて昔からあったという人も結構いるからです。今日はフェイクニュースに関連する次の 3 つの問いに答える形で、お話をさせていただきます。

Q1　「フェイクニュース」は新しい現象なのか？
Q2　「自分の頭で考える」ことは本当にいつも正しいのか？
Q3　AI に真偽の判断を委ねてもいいのか？

１．「フェイクニュース」は新しい現象なのか？

■誤情報、ニセ情報

最初の「フェイクニュースは新しい現象なのか」という問いは、フェイクニュースという言葉をどう捉えるのか、ということだと思います。それを考えるためにフェイクニュースの類型、フェイクニュースは一般的にどういうふうに分けられるかを整理してみますと、フェイクニュースというと、３つに分けられます。 1 つは「誤情報」という間違った情報/ミスインフォメーションで、自分のミスで間違ってしまったのですが、意図的にそれを間違えたわけではありません。2 つ目が「ニセ情報」/ディスインフォメーションで、意図的に嘘をつくという場合です。この嘘をつくということがどういうことなのかを考えてみると、結構難しくかつ面白い問題になります。動物のサルの場合には、ある種

の騙し行為をやるわけです。サルが仲間の食べている餌を横取りしたくて、敵が来ていないのに、敵が来た時に仲間に知らせるキーッという鳴き声を出すと、食べてるサル仲間が逃げてその餌を置いていく。このような餌を横取りする行為は、サルが行うある種の騙し行為と言われています。でも、それは「嘘をついている」ことにはなりません。

人間の場合には、自分は本当じゃない、間違っていることを分かっていながら、相手に間違ったことを信じ込ませることで自分に有利なことを引き出す。これが嘘を言うことの基本的な構造なわけです。何が本当で何が本当じゃないかを、分かっている必要があります。子供が自分のお腹が痛いと嘘をつくことができるようになるのは多分 3 歳か 4 歳ぐらいです。これは結構複雑なことで、本当は自分のお腹は痛くはないが、お腹が痛いと言うと、親がそれを信じて「幼稚園休んでいい」と言ってくれることを分かっていて、幼稚園を休みたいからお腹が痛いという嘘をついたわけです。この構造は、自分が本当は痛くないのに痛いと言えば、何が引き出せるのかを分かってやるわけです。何が言いたいかというと、嘘をつく人は物事の真偽についてすごく関心があるのです。だからこそ相手から疑われた場合には、別の違う証拠を持ち出したりして弁明をし、相手に信じてもらえるように必死に取り繕うのです。

■でたらめな情報

フェイクニュースの類型の３つ目が重要で、「でたらめな情報」がそれに当たります。英語ではブルシット（bullshit）という英語になりますが、直訳すると牛のうんちという意味です。一応日本語の翻訳で定着している「でたらめ」とそのまま書いてますが、この「でたらめ」というのは嘘と違うのです。嘘の場合には先ほど言ったように真偽に関心があって、間違ったことを相手に思い込ませようとしますが、それに対して「でたらめ」というのはそもそも真偽に全然関心がないのです。

「でたらめな情報」はまさにトランプ大統領が 2016 年の最初の選挙で当選した時に顕著に現れました。 大統領選挙の期間中に、マケドニア（現・北マケドニア）の青年たちがものすごいフェイクニュースを流しました。民主党に有利な情報もあったし、共和党に有利な情報もありましたが、どちらかというとトランプ側に有利な民主党攻撃の情報が多かったのです。実際にトランプの当選にどれくらい影響を与えたのかは詳細な分析が必要ですが、かなりのフェイクニュースが流されたのは間違いありません。アメリカと全然関係ないマケドニアの青年たちは何を目的にこれをやったのかと言うと、単純に大勢の選挙民にインターネット上の情報に関心を持ってアクセスしてもらい、アクセスしただけ報酬を得る仕組みに乗っかっただけなのです。彼らは後日、どちらが勝っても全然関心がない、選挙民にアクセスしてもらえるような情報を流しただけだ、と話していました。これがまさに「でたらめな情報」の特徴です。トランプ候補を勝たせようとして、対立するヒラリー候補を攻撃する情報を流すことは嘘をつくことです。それに対して「でたらめ」の場合は、1 番バズりそうな記事として仕上げ、その内容を信じるかどうかはどちらでも良くて、とにかくアクセスさせることが目的で、典型的なでたらめです。発信情報の真偽に全然関心がなく、その情報を流していくパターンなのです。この場合は嘘をつく人と違って、その情報は間違っているのではと指摘しても、全然相手には響かないわけです。

■フェイクニュースは新しい現象

もちろん「でたらめ」を言う人は昔からいたと思いますが、インターネットはこの「でたらめ」とかなり相性がいいのです。インターネット上でアクセスしてもらって報酬が得られる仕組みだけでなく、でたらめを言った人が全然責任を取らない構造になっているわけです。実社会では頻繁にでたらめを言うと、みんなから信用されなくなってしまいますが、インターネットでは別にそうならない。あたかも本当のニュースであるかのように偽装することで、流し続けることができる。流された記事は本当のニュースと見分けがつかないわけです。まさに「でたらめな情報」であるフェイクニュースがインターネット上に蔓延しているのです。こういうことからフェイクニュースっていうのは、やはりインターネット社会において生じている新しい現象だと言えるのではないか。これが 1 つ目の問い「フェイクニュースは新しい現象なのか？」に対する私なりの答えになります。

２．「自分の頭で考える」ことは本当にいつも正しいのか？

ネット上の情報を鵜呑みにしてはいけません、あの情報が正しいかどうかは自分の頭で考えて判断しなければいけない。これはいろいろなところで耳にタコができるくらい言われており、情報の教科書にも書かれています。中学校の公民の教科書にも書いてありますが、「自分の頭で考えることは本当にいつも正しいことなのか？」というのが ２つ目の問いです。私は重要な問いだと思っています。

■医者の診断への対応パターン、知的な謙虚さの必要性

例えば自分の体調が良くなくて病院に行き、医者からこういう病気の兆候が見えます、この薬を出しておくので飲んで下さいと言われる。この時に他人の言ったことを鵜呑みにしないで、自分の頭で考えるということが本当に正しいのかという問題です。いろんな対応パターンがあります。 １つ目の対応パターンは、先生はそう言ってるけど自分の身体のことは自分が １番よく分かっている、そんな病気のはずはないからこの薬飲むのはやめよう、というパターンです。これはある意味では自分の頭で考えることを実践してるわけですが、何が良くないのかというと、自分が医者よりも自分の病気について正しい判断ができると思っているわけです。これは哲学の認識論の中では、「知的な傲慢」という言い方をされます。

これに対して、自分の知ることができる範囲を自覚し、自分の体のことであっても医者のほうがよく知っているから医者の判断に委ねる態度を取る、ことを「知的な謙虚さ」という言い方をします。ただこの知的な謙虚さと言うのは結構難しいですね。自分が知ることができる範囲をあまり狭く見積もっても良くない。自分は何も知らないから自分よりも他人の判断に従った方がいい、というような知的な卑屈とも違う。行き過ぎも良くないけど、足らな過ぎも良くなくてまさに中庸の考え方で自分の知っている範囲を正しく見積もる、これがまさに「知的な謙虚さ」なのだと思います。

２つ目の対応パターンは、ネット利用において陥りやすいパターンです。医者にこういう病気なのでこの薬飲んで下さいと言われた時に、自分でネットで調べてみた結果を踏まえて、この薬は飲んではいけない薬だと自分自身で判断して服薬をやめるというパターンです。これはある意味では自分自身で情報を取りに行き、自分の目で確かめ、自分の頭で判断して薬を飲むのを止めるという点で知的な自律性を発揮しているように見えます。これまでのマスメディアの情報だと一方的に流されて受動的ですが、ネット上の情報を自分で調べ、更にそこからリンク先を辿って調べるわけで、この意味では自己の探求心に則って判断するという正しいことをしているわけです。しかし、ネット上の情報は本当に信じられる情報なのか、薬に関する自分の知識は十分か、医者と比較してどちらがより信じられるのかについて，十分な吟味がなされておらず、この意味ではやはり「知的な謙虚さ」に欠けているのではないかと思います。

■陰謀論、科学否定論

最近インターネット上の情報には、様々な陰謀論や科学否定論が見られます。地球温暖化の否定や地球平面説などは、我々からすると何でそれを信じるのだろうと思うのですが、このような人たちは一定のパーセンテージで存在しているようで、それはまさにネット上の情報環境を後押ししているところもあると思います。今年は、2001 年に起こった 9.11 同時多発テロ事件から 25 年になりますが、このテロ事件はアメリカ政府が自作自演で起こした事件だという陰謀論が依然としてネット上に流れています。私は陰謀論っていうのは、フェイクニュースと同じで、そもそも陰謀論というのは何を意味するのかをしっかり考えないで、陰謀論だから信じたらダメだ、と単純に判断してはいけないと思っています。一般的には陰謀論というのは隠れた何か動機があり、その隠れた動機に基づいて行われた何かの策謀や行動によって起こった出来事を説明するものとされます。この意味でいうと、アルカイダ犯行説もアメリカ政府自作自演説もどちらも陰謀論なのです。つまり、陰謀論の中には正しい陰謀論と間違った陰謀論があることになり、どっちが正しいか確かめることが重要になりますが、自分が判断できる領域を超え、自身では直接確かめられず、判断できない場合も出てきます。その時には信頼のおける誰かに委ねるほかないのです。私は外国へはあまり出かけないほうなので、外国の事案については自分自身だけで判断できないことが多く、その際には外国情報に詳しい知人やマスメディ

アの情報をもとに判断することが多いですが、なぜそれらの情報源が他の情報源に比べて信じられるのかを考えることが必要です。

■発信者の信頼性を判断する基準

最近では、ネット上のインフルエンサーがかなり影響力を持っていて、マスメディアや専門家の信頼度が相対的に落ちていると言う人もいます。またトランプ大統領じゃないですけれども、マスメディアはフェイクニュースを流しているが、インターネットでは本当のことが語られるという言説は結構、特にネット上では根強いものがあります。

インフルエンサー、マスメディアと専門家、更に最近であれば AI が言ってることのうち、どれを信じていいのかについては、簡単には断言できません。マスメディアが発信しているから正しいと言うこともできない、ネット上の拡散だから間違っているとも言えないので、結局その都度その都度 1 件 1 件しっかり吟味する必要があります。

インフルエンサーやマスメディアなどの多様な発信者の信頼性をどのように判断したらいいのかについて、判断する基準としていくつか挙げられます。そのひとつはどのくらい正直にその情報を発信しているのかです。嘘を言うことにどのくらいのメリットがこの発信者にあるか、あるいはでたらめを言うことでどのくらいのメリットがあるのか、をきちんと検討してみることです。もちろん発信者がその分野にどれくらい詳しいのか、どのような能力を持っているのということも重要です。

発信者の信頼性を判断する上では、その発言内容の責任をどれくらい背負うのか、どのようなチェック体制を持っているのかも重要です。私は著書の中で、マスメディアとインターネットのどちらを信じるべきかについて書いていますが、この本は古いタイプのマスメディアを擁護する本だ、と批判されて結構ショックでした。そんなことは書いていません。私がここに書いたのはどちらを信じるにしても理由が重要だということで、相対的にマスメディアの方がインターネットの情報より信じられる理由は、まさにマスメディアは誤報を出した時に責任を問われるからです。情報を発表する前のチェック体制もあるし、発表した情報に対して他のメディアがチェックして発信することもあるわけですね。これに対しインターネットの情報に対しては、一応ファクトチェック・イニシアティブ（FIJ）という組織が日本でもできてはいますが、マスメディアが現在行っているような総合的なチェックシステムや自己検証システムみたいなものはないわけです。

■確かな発信源の見極め、時には自分ではなく他人の判断に委ねる場合も

しかし当然マスメディアだから信頼できるということではなくて、マスメディアだって信頼できないメディアはあるし、インターネットだって信頼できるメディアはあります。発信者の信頼性を比較検討してみた結果、現状では相対的にマスメディアの方が優っているという話なのです。

発信されている情報に絶対的な確かさを求めることは不可能です。重要なことは相対的に確かな発信源を見極めることです。時には自分自身ではなく他人の判断に委ねざるを得ない場合もでてきますが、誰に委ねるべきかの判断は、自分で考え自分自身で行う必要があります。これが「自分の頭で考えることは本当にいつも正しいのか？」という問いに対する私の答えです。

３．ＡＩに真偽の判断を委ねてもいいのか？

３つ目の問いは、私の著書では触れていない内容の話になりますが、「 AI が言っていることを信じるべきか、ＡＩに真偽の判断を委ねてもいいのか」という問いです。私自身も結構 AI を日常的に使っており、特に大学の事務、書類作りなどに使っています。文章はほとんど自分で書きますが、誰がやっても問題ない業務は任せていいと思っています。そういう意味で AI を使っていくことには肯定的で、どんどん使っていったらいいと思います。ただ問題としては、 AI をどのぐらい信頼していいのかということです。

■ＡＩの飛躍的な能力アップ

ここ数年、特にここ数ヶ月、大規模言語モデル LLM と言われるモデルの能力が飛躍的にアップしているのは間違いなく、アメリカの司法試験の合格水準に達するような回答を AI が書きます。大学入試に関しても、共通テストで 9 割を大きく超える得点を取るレベルになってきています。更に最近で

は、数学分野の未解決問題の 1 つを OpenAI の GPT 系列の AI が解いたというニュースがありました。私の関係している学会の中でも、生成 AI を使った論文をどう評価するのかについては、まさに現在進行形で議論をしているところであり、完全に禁止することにはならないで、どこまでを許容するのかについて結構難しい問題に直面しています。

■道具としての AI

日常的には AI を調べ物のために使うのは全然問題なく、私も使っています。我々はこれまでも、計算能力や記憶能力のような認知能力を助けてもらうために、道具としてのいろいろな新しい技術に依存してきました。だから AI をそのための新しいバージョンの一つだと考え、我々がいろいろ物事を調べたり、あるいはまとめたり、そこから何かを抽出したりする能力を AI に託すこと自体は、そんなに問題ないように思うわけです。私とスマホのメモリを合わせた記憶力でいえば、私だけの記憶能力よりはアップしているのと同様に、私と AI を合わせてトータルで考えれば、トータルの認知能力は格段にアップしているといえるからです。

ただ、難しいのは大人はそれでいいと思いますが、子供にも同じように AI を使わせていいのかという問題です。現在中教審でも議論しているところですが、高校生や大学生の年齢では AI を使ってもいいと思いますが、少なくとも小･中学校の段階では自分自身でしっかり調べて、自分自身で調べた内容をまとめる能力を身につけることが重要だと私自身は思っています。最初から、 AI に丸投げしてしまうのは、子供自身の考える力、更には批判的な思考力や案件の要約力などが育たないことになるのではと懸念しています。やはり AI を使うことを制限する段階と使っていい段階に分けたほうがいいのでは、というのが私自身の考え方です。

■ＡＩの信頼性の評価、人間の専門家との違い

問題は、AI が出してきたアウトプットの信頼性をどう評価するのかということです。ネット上の AI の回答、インフルエンサー、マスメディアあるいは専門家による情報が入り乱れている状況で、だれの言っていることを信じるべきなのか、特に食い違ってる場合にどちらの情報を信じるのかという問題です。

私は現段階では人間の専門家のほうが AI よりも信頼性が高い、と評価しているのですが、 AI と人間の専門家は何か違うかと考えた時にいくつか違いはあると思います。 1 つ目は「どのぐらい正直にその情報を発信してるのか」という観点です。 AI は基本的には嘘はつかないんですね。ただしそれは正直だから嘘をつかないのではなくて、そもそも真とか偽とかについて興味がないのだと思うのです。 AI の考え方のメカニズムからすると、この文章の次に最も来そうな語句が何になるのかを確率予測して、それを文章としてアウトプットしているわけです。そういう点では最初にお話しした「でたらめ」なわけです。この「でたらめ」は間違ったことの発信という意味でのでたらめではなく、そもそも真か偽については関心がないっていう意味でのでたらめなのです。この点はしっかり認識しておく必要があると思いますが、少なくとも人間の専門家は、それが真なのか偽なのかに動機付けられて研究をしているわけで、ここは大きな違いだと思います。

2 つ目は情報発言にどのぐらい責任を持っているか、責任を負えるのかという信頼性の問題です。AI 自体は責任は負えないわけです。自分の意志でそれを行ったのであればそれに対して責任を負えるのですが、 AI は自分の意志でそれをアウトプットしているわけではなく、プログラムに従って確率予測を算出しているだけであって、 AI 自体はなんらかの意志を持ってるわけではないので責任の主体にはなり得ず、責任を負うことはできないのです。その AI を開発した会社法人が責任を負えるかもしれませんが、人間の専門家とは違います。人間の専門家であれば、コロナ感染の予測が間違ったとしたらその人は責任を問われるのです。やはり背負ってるものは違うのです。

3 つ目はどういうチェック体制を持ってるのかです。これに関してもやはり人間の専門家と AI は違っていて、 AI は外部のチェックシステムがありません。 AI が算出した結果が正しかったかどうかについて、他の誰かがチェックすることはないわけです。人間の専門家の場合は、一応査読システムを持っていて、発表あるいは論文として出された案を誰かがチェックして、オーケーと判断したものだけが発信されることになっています。専門家同士が互いに評価し合うシステムも持っていて、間違

ったことを言う専門家は別の専門家から批判されるわけですね。 AI に関しては現在はこういうチェックシステムは十分ではないので、少なくとも人間の専門家と同じような信頼性を得ることは難しいのではないかと思います。

■ＡＩへの対応、知的な忍耐力、そして知的な徳

しかし、日常的に使っていくと AI に対する信頼は高くなっていきます。その理由の 1 つは AI が擬人化して自分のことを心配してくれるとか、 気遣ってくれるような情報発信が結構あるからです。実際にはある種の確率予測によりアウトプットしているだけなのですが、ものすごくそのアウトプットに対して親しみを感じて信頼も置いてしまうのです。 AI は聞き上手なんですね。ある調査では、感情を共有できる相手として、AI が親友や母親を上回ったという結果も出ています。 AI に対する信頼感がものすごく増してきているように思います。

今後調べ物だけでなく、思考や批判なども全部 AI に任せていくと、我々の考える機会がどんどん無くなっていきます。これは本当に我々にとって良いことなのか、考えていく必要があります。このためにはやはり、 AI だから信じられない、 AI だから信じられるというような大雑把な話ではなく、どういう AI なら、あるいはどういう領域についての回答であれば信じられるのかについて、 1 つ 1 つしっかりと判断していく必要があります。これ結構面倒くさく忍耐が必要です。 AI に丸投げでいいとか、逆に AI を全然使わない方がいいという判断は、楽なのかもしれませんが、やはり我々がどこまで、どういう AI を信じて良いか、信じてはいけないのかについて、その都度考えていくことが必要で、それを私は「知的な忍耐」という言い方をしています。これから一層 AI が主導していく時代こそ、こういう「知的な忍耐力」がますます必要になってくるのではないか、と考えております。以上が「AI に真偽の判断を委ねてもいいのか？」の問いに対する答えになります。

今日お話した「知的な謙虚さ」、「知的な忍耐力」などは、知識や真理を探究するときに必要な「知的な徳」という言い方をされ、善いこと、例えばその仲間の命を助けるような倫理的な徳、いわゆる道徳とは区別されます。ロシアのジャーナリストが真実を探求するために、ロシア政府が禁じている案件の取材をする、これはまさに真理を探求するっていうことに動機付けられた知的な勇気なんですね。私は学校に行って講演する時には、このような「知的な徳」の重要性についてできるだけ話をするようにしています。哲学を表す philosophy という英語は、ギリシャ語の知/sophia を愛する/philein からできています。フェイクニュースと AI の時代において、情報の真偽を見分けるために、「知的な徳」をいかに発揮するかということが非常に重要なことだと思います。

【質疑応答】

Ｑ１：情報発信者の信頼性を判断するうえで、正直さの重要性を挙げておられますが、この正直であるかどうかをどのように確かめればいいのか。

Ａ１：正直にも、おそらく倫理的な正直さと知的な正直さの両方があるかなと思います。倫理的な正直さと言うのは、相手に対して真心を持って、そして誠意を持って接するし嘘偽りのないもので、一方知的な正直さというのは、まさに科学的に何が正しくて何が真であり、何が偽であるのかに関して、嘘をつかないという意味での正直さだと思います。

医者が患者に対して倫理的に正直であるからといって、それが知的に正直であるかどうかは、別の問題になるので、そこは区別して判断した方がいいのではないか。子宮頸がん（HPV）ワクチンのように社会的に大きな議論となった案件に関しては、先ほど言ったように私達素人が判断をするのは難しいと思います。そうした時にはやはり専門家のマジョリティの判断をもとに選ぶことが、正しい判断に近づく道ではないかと思います。

Ｑ２：最近よくニュースで耳にするのは、AI 開発者の意図に反して、他の企業や公共機関の情報システムに侵入したという事例です。こういうニュースは過去には SF 小説などで予測されていたことのようですが、どのように捉えればよいのか。

Ａ２：今お話しいただいたニュースや論点は、まさにAIの境界事例になってきているのかなと私も思います。ChatGPTみたいな通常の生成 AIの場合には、彼らが他のシステムに侵入したとしても、彼ら自身の意図みたいなものがあるかというと、私は現段階ではないのではと思います。しかし今後AI自身の明らかな意図みたいなものを認めるような状況になるかもしれません。もしかしたらそれは結構近づいているのかもしれないと感じるときもあります。

Ｑ３：生成AIの回答には、責任逃れとも読めるような、不正確な場合もありますという但し書きが入っています。私は現時点では、 AIの回答を信じるか信じないかではなく、あくまでも我々の判断のための参考であると捉える姿勢が根本として大事ではないかと思いますが、先生のお考えをお聞かせ願います。
Ａ３：AIの回答はあくまでも参考意見としてとらえ、自分で最終的な判断をすると言う基本姿勢は、私もその通りだと思います。ただし難しいのは、かなり専門的な内容に関して自分自身で正しいかの判断をできるかどうかの問題です。例えば気候変動が人間の経済活動によって起こってるのか、無関係なのかという問題です。科学者の間では人間の経済活動が気候変動の主な原因であることがほぼ合意されていますが、それを否定する人たちもいます。こういう議論があった時に自分自身で気候変動の本当の原因を突き止められるかというと、残念ながら私はその専門的な能力は無いので、やはり確かな信頼性を有する専門家の判断に委ねるしかないと思います。

Ｑ４：数年前から、小学生から高校生に対してタブレットが配られデジタル教科書が徐々に広まってきていますが、今後どのような利用のされ方になるのか。
Ａ４：タブレットを利用したデジタル教科書に関しては、基本的には活用していく方向で進んでいくと思いますが、やはり紙の教科書の利用の声も根強く、2030年度からは紙・デジタル・両者を組み合わせたハイブリッドの3形態から選ぶ制度になります。デジタル教科書の良さは、持ち歩くことの負担は軽減しますし、動画や音声などの素材を活用できたり、文字数の制限がないので紙より丁寧に説明できたりします。そのため、主体的に深く学ぼうとする子供達にはメリットがあると思います。一方紙の教科書には長年にわたって継承されてきた実績があり、私達の読み書き能力の基礎を作ってくれました。中教審でも紙の教科書とデジタル教科書のメリット，デメリットが議論されており、やはりしばらくは併用しながらの試行錯誤が必要で、どちらをメインにするかは、これらの試行錯誤を踏まえたかたちで決まっていくのではないかと思います。

山田　圭一（やまだ　けいいち）先生のプロフィール

【現職】
千葉大学人文科学研究院 教授
専門はウィトゲンシュタイン研究と現代認識論、言語哲学。学校教育のなかでの哲学の役割にも関心。
【経歴】
1973年群馬県生まれ
1997年京都大学文学部卒
2007年東北大学大学院博士課程単位取得退学。博士（文学)。
文部省事務官、学習塾講師、山形大学人文学部准教授を経て現職。
【著書、訳書】
『ウィトゲンシュタイン最後の思考―確実性と偶然性の邂逅―』（勁草書房、2009年）
『フェイクニュースを哲学する―何を信じるべきか』（岩波書店、2024年）
　フィッシュ,W.『知覚の哲学入門』（監訳、勁草書房、2014年）